

上代における母音音節の脱落について

森山, 隆
九州大学助手

<https://doi.org/10.15017/12355>

出版情報 : 語文研究. 6/7, pp.40-48, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

上代における母音音節の脱落について

森 山 隆

上代における一つの顕著な音韻現象に頭母韻脱落の現象があるが、これは一般に母音連接忌避の現象として、他の母音縮約の現象と共に、かなり統一的な法則によつて把握されてゐる。たとへば大野晋氏は「万葉集大成」第六卷(言語篇)において、

母音の連続を避ける傾向は極めて顕著で、複合語の後項の語頭が母音音節である場合は、

(1) 一方の母音が脱落する。この場合は原則として前項の末尾の音節の母音が脱落する。

- 長雨 *nagame* → *nagame*, 仮慮 *karifto* → *karifo*
 - 遠音 *tōfōtō* → *tōfōtō*, 荒磯 *araiso* → *ariso*,
 - 河内 *katauti* → *katuti*, 荒海 *arajumi* → *arumi*
 - 蝦の藍(紅) *kurendawi* → *kurehawi*,
 - 我が妹 *wagaimo* → *wogimo*
- ただし、後項の語頭の母音が、前項の末尾の音節の母音より狭

い母音である場合は、後項の語頭の母音が脱落することがある。

- 片原 *katamōfiri* → *katamōfiri*, 小石 *sazareisi* → *sazaresi*
- 羅石 *fanareiso* → *fanareiso*, 妹が家 *imogaife* → *imogafe*,
- 竜の馬 *tatundūma* → *tatundūma*, と西ふ *tōfū* → *tōfū*.

(2) 麥母音を形成する。

- ia* → *e* 咲きあり → 咲けり *sakari* → *sakeri*,
- 寝けく(寝きこと) *ukiaku* → *ukeku*,
- ai* → *e* 高市 *takaiti* → *taketi*

(3) 両母音の間に子音を挿入する。

春雨 *faruame* → *farusame*, とその大綱を示された。そしてこの母音連接の忌避といふ現象過程を逆に辿ることによつて、古代語の再構や、ク語法の説明にも効果的に応用され、また特殊仮名遣の分野で

は、エ列乙類音の発生に関する推定^(註四)や、母音相互の性質の究明にあてられてゐる場合もある。^(註五)これらの事は端的に母音連接の忌避といふ現象が、上代語の一つの特殊な性格であることを物語つてはゐるが、音韻に関する面からの十分な説明のわりに、語としての特殊な性格や事情がや、閑却されてゐる点がないではない。私はかつて前掲^(註六)(2)の変母音を形成するある場合について論じたことがあるので、ここでは(1)のただし書きの項について考へてみたいと思ふ。といふのは私見によれば母音連接忌避の現象が、純粹に音韻現象として説明できるのは(1)の場合だけであつて、(1)のただし書き、(2)及び(3)の事例には、語構造及びその構成の面に触れる問題があるのではないか、と思はれるからである。そのやうな観点から以下個々の事例について吟味して行きたいと思ふ。それについては(3)の事例を子音の挿入と見る説と、一語の交替形と見る説があることも参考にすべきであらう。

ここで注意すべき事は、頭母音音節の脱落現象を起す語は、基本的な母音縮約の線に沿つた熟合形をもつてゐることとで、この二つの変化が共時的に行はれ得たとするならば、同様の現象を同じやうに狭い頭母音をもつイけ(池)、イめ(夢)、イロ(色)、イタ(板)、等の語にも期待してよきさうである。これらが恣意的に起り得なかつたこと

は、脱落現象を起す語が単に共時態的視野で処理され得ないことを暗示してゐる。

たとへばカタモヒ(片思)といふ例は万葉集には訓仮名表記しか見出せないが、オモフ(思)が複合語を形成する時、シタモヒ(十七・³⁹⁷³)となり、助詞と、し、ぞ、は、が、等に接続する際、モフといふ形をとることから、当然語数の関係でカタモヒとなることは考へられる。然しながらこれは直ちに頭母音の脱落である、とは断定できない。なるほど「思ふ」といふ語の脱落形モフは、万葉集中に約五十例近く求めることができるが、これらの事例は前項末尾の母音の広狭にかかはらず脱落を起してゐるのであつて、万葉集全体を一共時態とする大まかな立場をもつても、少くとも前項末尾の広母音によつて脱落した形であるとはいへないのである。更に書紀の歌謡にウルハシミモフ(38)といふ例も見え、他に七例ほど記紀に既に脱落形が存在することは、万葉集中の脱落形が、母音連接のそのたびに起つた現象ではなくて、前代から引継いだ複合語形であつたと見ることが出来る。単に複合要素としてのみでなく、助詞にも自由に承接することは、一語としてかなり独立性が強く、オモフに対するゼロ・フォームの交替形と見るべきであらう。そして又このことは紀記の時代にも万葉の時代と同様の言語意識で支へられてゐたらしいこと

は、前例のやうに狭母音の後でも脱落する事例のあることから推測される。

「思ふ」に次いで脱落形が多いイヅ↓ヅ(出)の場合は、殊に頭母音が最も狭い[i]であるために、複合の際前項末尾の母音は常に同等もしくはより広い母音なので、一見母音脱落の好例と見做されがちである。たしかにフナデ(船出)、カドデ(門出)、ミヤデ(宮出)、カナトデ(門出)の例はあるが、他の脱落の用例(記4.紀7.万葉25例)はすべて前項末尾の母音が[i](動詞四段連用形、及び助詞「に」)で、これらは $i \rightarrow i$ の同化現象の結果であらうし、複合要素としての $de \parallel \wedge$ 出 \vee 意識は十分喚起される条件を備へてゐたと思はれる。従つてミヤイデ \vee ミヤデ、フナイデ \vee フナデ、カドイデ \vee カドデ、ではなく右の類推からミヤ十デ、フナ十デ、カド十デ、の結合によつて生じた複合語であらう。

上代において最も多数の脱落形の事例をもつ「思ふ」「出づ」の二語が、それ \searrow 万葉時代に起つた音脱落現象によつて生じた形でないとするば、用例の分布状態を参照して、その当初はおそらく紀記の前代にまでさかのぼることができよう。少くとも万葉人は「モフ」「ヅ」の二語を、かなり独立性の強い語として、前代から引き継いでその言語意識の中に収めてゐた筈で、その使用に際して今日

指摘されるやうな頭母音節の脱落現象を実現したものはなからう。

同一の音形式を持ちながら、一方の語において脱落形が存在し、他方の語に全く見受けることのできない例も亦注意する必要がある。紀記に3例、脱落形としてのみ存在するエ(飢)といふ語は、後に同一詞章がイヒニウエテ(今昔物語集第十一卷 聖徳太子於此朝始弘佛法語第一)と言ひ換へられて伝へられたやうに、上代においてもエはウエの脱落形と見る向きもあるが、この脱落が助詞「に」の後で起つてゐる点からも、母音連接が直接の原因であつたとは考へられない。またこの詞章の伝承が、エ↓ウエと置き換へられたのは、とりもなほさずエ \parallel 飢 \vee といふ上代人の言語意識が、中世人のウエ \parallel 飢 \vee といふ言語意識によつて訂正されたことであり、上代歌謡の担ひ手達には \wedge 飢 \vee を喚起する音形式はまだエで十分だつた筈と思はれる。そして他方ウエ \parallel 植 \vee (万葉に13例)の語にエといふ脱落形が見えないことは、エ \parallel 飢 \vee の生起が単に音声的な要素―母音連接といふ―のみで決定されるものでないことを意味する。

大野晋氏はカタモヒ(片思)、タツノマ(竜馬)の例を、前項末尾の広母音の影響による母音音節の脱落の事例に加へられてゐるが、最初にこの現象を調査検討された岸

田武夫氏は、ウエ↓エ（飢）の例をも併せて、いづれも後続頭子音の *m*、*w*、などの調音部位の近接による脱落と推定されてゐる。しかしながらウマ（馬）^(註)の場合に關しては少くとも次のことは考へられさうである。即ち、(イ) タツノマ（竜馬）、アガマ（吾馬）、のやうに広母音のあとで脱落した形、(ロ) ミマ（御馬）、のやうに狭母音のあとで脱落した形、また(ハ) フツマ（太馬）、ハユマ（馴馬）のやうに前項末尾母音が脱落して生じた縮約形、更にはコマ（駒）といふ語も存在してゐるので、たとひ原型ウマから↓マの脱落方向を認め得たとしても、(イ)の例のやうに二語の熟合によつて生じた脱落形マが、かなりの独立性をもつて、あらためてミマといふ形で結合したり、また広母音のあとで脱落し易い頭母音ウが、フツマ、ハユマの場合には、フト（*o*）、ハヤ（*a*）の前項末尾の広母音を排除するほどの一語としての固い結合を示してゐる点から、一其時態にはとんど同時に起つた現象と説明するには、やゝ不十分な母音法則である観を免がれ得ない。特にこのウマといふ語の場合、漢語よりの借用語ではないかといふ疑問がつきまといひ、たとひ奈良時代ウマといふ音形が確立されてゐたにしろ、輸入された当初の形からウマといふ音形式が確立される過程を無視して、ただちにウマ↓マの脱落を想定するのは疑問の余地がある。したがつて、借用關係を考慮に入れ

てこの語の正確な祖形を知ることなくして脱落の事例とするのは早計であり、今日残存する承接の事例も、前項末尾の広母音による脱落を明瞭に証するものではない。

以上の事例を通して考へられることは、通常上代における母音音節の脱落として考へられてゐる現象が、少くとも共時的現象として他の縮約現象と共に万葉の時代に起つたと認めることは妥当ではないといふこと、また上代の人がそれらの形を複合語構成の一要素として紀記時代より言語意識の中に成立させてゐたこと、特に動詞においては複合語中といふ制約を離れて自由に助詞などにも接続できる独立性をもつてゐること、更に以上のことから推定できることは、紀記万葉に残存する母音音節の脱落といはれる現象が、たとひ往時の古代日本語に行はれた脱落現象の痕跡であるとしても、現存する多くの事例は、必ずしも複合語における前項末尾の広母音による頭母音脱落であるといふ説明を十分に証明するものではない、といふことである。

それでは一見明瞭に前項末尾広母音に接続してゐるイヘ（モ）（家の妹）ワがへ（我家）などの例は、どのやうに解釈すべきだらうか。もちろん前者は防人歌（二十⁴³⁸下総）にただ一例見えるだけで、東国方言といはれる特殊な性格を十分に把握することなくして説明を試みることは危険であらうが、同じ語が他方ワギモ、ワギへ等の縮約形をもつ

のは然るべき理由が与へられてよい。

このことについて、いささか関連をもつと思はれるのは例のトフーチフの形をもつ「言ふ」の場合である。次表の如く、チフの形が生じたのは万葉初期だと思はれるが、これはトフの形が直接チフの形に変わったものでなく、チフはトイフから生じた縮約形と考へるのが普通である。といふことは、ある時期の人々にトフの形ではトイフの意を喚起するに十分でないといふ抵抗感をもつたものらしく、それで改めてトイフといふ形をとり、母音縮約の一般的法則に従つて、チフを生じたものであらう。

C, (註二)

					記	紀	万葉卷五、七、八、十五、十八、十九	(防人歌)
ト	フ	1	1	1	2	1	3	十四、二十
ト	ヘ							
チ	フ		2	1	1	1		
テ	フ							

従つて、トフはやゝ古い形であると思はれるし、トフに舌足らずの意味喚起を覚える人達は、使用できなくなりつつあつたと考へてよいだらう。更に平安時代にテフといふ形が多用されたことを考へ併せると、母音脱落による語形

の変化に通時的観点のとれる可能性あることを明瞭に示してゐると思はれる。

即ち、モあるいはへといふ音形式によつて喚起されてゐた \wedge 妹 \vee 、 \wedge 家 \vee が、万葉時代すでに複合語中においてのみ痕跡的に残存するのみで、イモあるいはイへの語が多用されてゐるといふことは、モあるいはへの一音形式を支へてゐた言語意識が既に消滅してゐたからだと推測できよう。でなければ、当時複合語として存在してゐたワがへ(五、⁸¹⁶₈₃₇)イモがへ(五、⁸⁴⁴₁₄₄₁)、タマテノへ(紀¹²⁷)の語が十分にへ \parallel \wedge 家 \vee の言語意識に支へられてゐたとするなら、わざ／＼ワギへといふ形を生ずることもなかつたであらう。 \wedge 妹 \vee を喚起する音形式がモでなくてイモでなければならなくなつてこそ、ワがイモからワギモといふ変化は起り得るのであつて、このイが複合語構成の際、自由に脱落する頭母音であるなら、依然複合語形はモで通つた筈だと思はれる。

それでは古代日本語においてはイモあるいはイへといふ語は複合語を構成する際に、モあるいはへといふ頭母音イの脱落現象を生じたと考へて差支へないものであらうか。

\wedge 家 \vee あるいは \wedge 妹 \vee をあらはす古代日本語の音形式がそれぞれイへ、イモであつたなら、二音の何れかの脱落は当時の人々の言語意識に、ある抵抗を生ぜしめたに違ひな

い。そのことがおそらく上代日本語への過渡期に、複合語における脱落形の存在を許さなくなつてきたものとする。当初古代日本語において \wedge 家 \vee 及び \wedge 妹 \vee の意味の中核を示す音形式はそれぞれ \wedge 及び \vee であつたと思はれる。これは上代日本語においてイモあるいはイヘといふ二音形式をとつて一語化したことを意味してゐるが語構成の上からはイ+モ及びイ+ヘの複合であつたと思はれる。

それは例へば \wedge アノと(足の音)、 \wedge ユヒ(足結)の \wedge 足 \vee が、現在では \wedge シ(足)でなければならぬやうに、また梅ヶ枝(エ)、梅の枝(エダ)におけるエ、エダの両形の存在に類似の状態が指摘されよう。

古代日本語においては二語の複合であり、上代日本語において一語化した語としては、ウミ(海)などがあげられよう。ウはおそらくウシホ(潮)、ウナクダリ(海下り)ウナカミ(海上)等のウと意味の中核を同じくし、ミはまたタルミ(垂水)、ニハタヅミ(庭漕)、イヅミ(泉)、のミと同義であると思はれる。したがつて従来、アフミのミの例をもつて、ウミ(海)の脱落形と説明してゐるのも \wedge 淡海(海)の義であれば、今日深海の海、白い白墨、といふ誤りに似た論理的重複の嫌ひがあり、このことは当然、淡海が実質語として的一般性を、地名の特殊性にすりかへられた後、はじめて \wedge 淡海)の海、が複合語として成

立したものでなければならぬ。その形成はおそらく古代日本語の時代であつたとすれば、アフミのウミからアフミのミといふ脱落を辿つたものか、当初からミ(水)の一語が接続してアフミのミを形造り、その地名化と共に \wedge (淡海)の海 \vee の義に転成確認されたものと見ることができ(註二)

同様にイへのモ、ワがへといふ複合語において示されたモ、へといふ一音形は、上代日本語における共時態の意味のイへ、イモの脱落形ではなく、二音形に複合固定する以前の祖形、ないしは意味の中核を示す形ではないかと思はれてくる。少くともそのやうな推測を挿む余地はあると思はれる。

そしてイへのモ \downarrow \wedge 家の妹 \vee 、ワガへ \downarrow \wedge 我が家)の喚起に次第に抵抗を感じた時期の人々が、あらためてワがイモ \downarrow ワギモ、ワガイへ \downarrow ワギへの母音縮約の一般的法則に従つた形を漸次使用することになつたものと解釈することができ。逆にワギへ、ワギモの形がすでに一語意識によつて支へられていたのであつたなら、ワガイへ、ワガイモといふ四音節形を使用するには及ばないであらうし、それからワガへの脱落の形は更に導き出される機会が少いと思はれる。

もちろん現在残されてゐる資料における脱落の分布は、

右の仮説がすべて直線的に行はれたことを示す痕跡を証するものではない。然しながら語の運命が、規則正しい消長を記録の上に残すものではないこと、これまた周知の事実である。各脱落形の分布が語彙的にも数的にも、紀記及び東国方言^(註三)、防人歌に多く、万葉集の大部分を支へた中央官僚歌人の歌に少いことは、いつてみれば官僚歌人により規範意識が強く、紀記の歌謡には伝承歌としての磨滅や、口承そのままの記録のためであるとも思はれるし、東国方言や防人歌に見えるものは、民衆の間に根強く生きてゐた語形かも知れない。いづれにしろ社会が細分的に多くの階層にわかれ、地域的にも歴史的にも十分特色をもつ多くの言語圏を背後に控へ、その一面の投影にすぎない紀記万葉の事例を、一つの法則に収斂できればすなはち上代における共時態的な特色にもなるであらうが、以上述べてきたやうに、母音縮約のただし書きに該当すると把握された頭母音音節の脱落現象は、その多くの例が決して単に前項末尾の広母音の影響によつて生じた形と結論されるにはかなり複雑な様相を呈してゐること、それはむしろ語自身の成立過程と構造に多く原因してゐると思はれる節があること、そのことは前項末尾母音の脱落によつて生じた縮約形が、

一熟合形として新しく非分割形を形造るのに対して、同じ音連鎖形式であつても、頭母音の脱落形を含む複合語はあ

くまで二語的性格をもつてゐるといふ語構造の特色が無視されてはなるまい。

更には(1)のただし書き、(2)及び(3)の事例が、限られた少数の語彙にみられる現象であるのを見れば、これを一般的法則として古代語の再建に何等の条件もなしに応用することは、(1)の法則を応用する際以上の細心の考慮が必要とされるだらう。

また、(1)の母音縮約といふ現象が、はたして母音連接の忌避といふ立場からとらへることが妥当であるかどうかはともかくとして、母音音節の脱落や、変母音形成の現象は、縮約現象と異なつた理由をもつものであると解しておきたい。

註一 同書三〇八頁。ただし、最初にこの調査をなされた岸田武夫

氏と用例のあげかたに異同がある。岸田武夫氏「上古の国語における母音音節の脱落」(国語と国文学昭17・8)

註二 たとへば亀井孝氏国語学第十六輯「ツルとイト」十七頁カハツ及びカヘルの語源参照。

註三 大野晋氏、国語学第八輯「古文を教へる国語教師の対話」九二〜九四頁。

註四 亀井孝氏 CHINESE BORROWINGS IN PREHISTORIC JAPANESE P28~29 Note 58

註五 泉井久之助博士「上代日本語における母音組織と母音交替」

(京都大学文学部五十周年記念論集所収)

…eのすべてが ai から来たとは考えられない。しかし、ai から来たものをふくむことは、ë がほとんど ä として、e より広い口蓋的母音であつたことを示すと思はれる。(101頁、1002頁)

註六 「上代における連母音 ai の転化について」(国語学二十八輯)
 註七 浜田敦氏「古代国語における挿入的子音」(人文研究一ノ七)四三頁。

七)四三頁。

龜井孝氏、前掲註四書⁷⁶及び国語学第十六輯「ツル」と

「イト」十一頁

註八 A

(1) オ	モフ	記	紀	五	十五	十七	十八	十九	二十	十四	二十
(2) モ	フ	4	4	4	16	4	1	1	5	13	4
											0

B

(1) イ	ヅ	記	紀	五	十五	十七	十八	十九	二十	十四	二十
(2) ズ		4	7	1	4	2	2	0	6	12	5
											4

右表はカナ書きの事例を便宜巻別に集計したものであるが、東
 国方言においては脱落形が多用され、紀記の比率も万葉時代の
 比率より高いといふ明瞭な形勢がわかる。巻十五のモフ16例中

11例は中臣朝臣宅守(宅守はオモフを10例使用してゐる)で、
 官僚歌人の中でも個人差が著しいといふことは純粹の音韻現象
 とみるより、モフを独立の一語として把握し意識してゐたため
 と思はれる。

註九 武田祐吉博士は、エは飢ゑる意の動詞の連用形、と頭註に示
 された。朝日古典全書「日本書紀」4²⁵⁷頁頭註。歌の伝承と、
 語の古さ(出雲風土記意字の条に見えるオエとも関係があら
 う)からみても後代の形から単純にウエの脱落とするのは危険
 であらう。

註一〇 「馬」が奈良朝又はそれ以前の時代に *uma* といふ形であつ
 たことについては有坂博士にお説がある。

「上代音韻攷」⁶⁹⁰頁、⁶⁹⁶頁。

註一 さまの註八AB表と比べても動詞における脱落形は紀記およ
 び東国方言に顕著な現象であるといへる。

註三 古代農耕文化に水の果す役割の重要性は風土記に水源に關す
 る地名起源説話の多いことによつてもその一斑は知られるが、
 それだけに水源及び周辺の命名がかなり古いものであることを
 思はせる。記14、紀8にイセのウミのと歌はれたやうに、地名
 十八海Vの二語意識の連接の場合は字余りとなつても八海Vの
 ウ音の脱落は起り難いのである。万葉歌人が、淡海の家と表記
 しても、語源と同等の概念を表示したといふことにはならな
 い。

註三 サザレシ(小石)十四・³⁴⁰⁰コトタカリ(言痛)十四・³⁴⁸²の
 二つの脱落形は例からいへば巻十四にのみ見出せるが、八石V

はシの借削仮名として万葉集に多用され、殊に石著（シヅク）
△沈▽七・¹³¹⁹の例は△石▽^{||}シの表記意識が中央人にも成
立してゐたことを意味する。